

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2013 年 12 月

「キリストの性質—受肉の期間—（I）」「福音の勝利」

「第一天使のメッセージ『神に礼拝せよ』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストの性質—受肉の期間— (I)」 4

朝のマナ

「福音の勝利」 9
信仰によってわたしは生きる

現代の真理

「第一天使のメッセージ- 神に礼拝せよ」 41
三重のメッセージ

力を得るための食事

「ロックガーデン風ベジカレー」 50

お話コーナー

「物語の結末 (けつまつ) は？」 52

教会

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話 : 0494-22-0465
FAX : 0494-40-1045

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話 : 088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話 : 0980-55-8136

アクセス

ホームページ : <http://www.4angels.jp>
メール : support@4angels.jp

発行日 2013 年 11 月 29 日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Sozai on front cover;
HighRes on pages 48

見張り、祈り、働く

も っとも効果的に教え、宣べ伝える者は、謙遜に神を待ち望み、そしてこのお方の導きと恵みを飢え渇くように見張る者である。見張り、祈り、働く—これがクリスチアンの合言葉である。真のクリスチアンの生活は、たえず祈りの生活である。彼はある日の光と力は、翌日の試練や戦いのためには十分でないことを知っている。サタンはたえず自分の誘惑を変化させている。毎日わたしたちは違った状況におかれる。そしてわたしたちを待ち受けている試されたことのない光景は、新たな危険に囲まれており、たえず新しく予期しない誘惑に攻撃されるのである。わたしたちが誘惑に直面し、自分の前にある義務を果たすことを希望できるのは、ただ天から得る力と恵みを通してのみである。

わたしたちが効果ある祈りを捧げることができるのはすばらしいことである。価値のない過ちの多い死すべき人間に、自分たちの要求を神にお捧げする力がある。わたしたちはこれ—無限の神とつながること—以上に、どのような高い力を望むことができるであろうか。弱く罪深い人間に自分の造り主に語る特権がある。わたしたちは宇宙の君主の御座に届く言葉を述べることができる。わたしたちはイエスと道すがら語ることができる。そしてこのお方は、あなたの右にいる、と言われるのである〔詩篇 16:8 参照〕。

わたしたちは心のうちで神と交わるかもしれない。わたしたちはキリストと共だつて歩くかもしれない。日常の仕事に携わるときに、わたしたちはどの人の耳にも聞こえない心の願いをささやくかもしれない。しかし、その言葉は沈黙のうちになくなったり、消えてしまったりすることがない。何ものも魂の願いをかき消すことはできない。それは通りの雑踏を越え、機械の騒音を越えて上って行く。わたしたちが語りかけているのは神であり、わたしたちの祈りは聞かれるのである。

そうであれば、求めなさい。求めなさい、そうすれば受けるであろう。謙遜を、知恵を、勇気を、増し加わる信仰を求めなさい。すべてのまじめな祈りは答えられる。それはあなたが望むとおりに、あるいはあなたが待っている時には来ないかもしれない。しかし、それはあなたの必要にもっともよく応じる方法と時にもたらされる。あなたが孤独なときに、弱っているときに、試練のときに捧げる祈りに、神は答えて下さる。いつもあなたの期待通りではないが、必ずあなたの益のために答えて下さる。(福音宣伝者 257, 258)

贖罪

キリストの性質―受肉の期間― (I)

I. 受肉の奥義

神の御子の人性はわたしたちにとってすべてである。それはわたしたちの魂をキリストに、そしてキリストを通して神に結びつける黄金の鎖である。これがわたしたちの研究課題となるべきである。キリストは実際の人であられた。このお方は人となられることによって、ご自分のへりくだりの証拠をお与えになった。しかし、このお方は肉における神であられた。わたしたちがこの主題に近づくとき、燃える柴のところでモーセに語られたキリストの言葉に注意を払うが良い。「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」。わたしたちは、悔いた心をもって、学ぶ者のへりくだりをもってこの研究主題に向かうべきである。そのときキリストの受肉の研究は、隠された真理を探って深く掘り下げる探求者に豊かに報いる実り多い分野である。(ユース・インストラクター 1898 年 10 月 13 日)

人類を救うために考案することのできた唯一の計画は、神の御子、天の全能者の受肉、屈辱、そして十字架を要求するものであった。救いの計画が考案された後、サタンは、神は非常に偉大であるがゆえに人間のように意味のない被造物のために心をかけることはおできにならないとほめかす根拠がどこにもなくなった。(サインズ・オブ・タイムズ 1890 年 1 月 20 日)

人性におけるキリストの受肉を熟考するとき、わたしたちは人間の思いでは理解できないはかりしれない奥義の前に立ちすくんでしまう。わたしたちがそれを瞑想すればするほど、ますますそれは驚くべきものに見えてくる。キリストの神性とベツレヘムの馬ぶねの中の無力な幼子とは、なんとまったく対照的なことであろう。わたしたちは大能なる神と無力な子供のあいだの距離を、どのようにはかることができるであろうか。そして、諸世界の創造主であり、満ちみちた神格が

かたちをとっておられるお方が、馬ぶねの中の無力な幼子のうちにあらわされたのである。御使のだれよりもはるかに高く、尊厳と栄光において御父と等しくありながら、人性の衣をまっとおられるとは。神性と人性が神秘的に結合して、人と神が一つになられた。わたしたちが自分たちの墮落した人類の希望を見いだすのはこの結合においてである。人性におけるキリストをながめるとき、わたしたちは神を見る。そしてこのお方のうちに神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿を見るのである。(サイン・オブ・タイムズ 1896 年 7 月 30 日)

働き人がキリストの生涯を研究し、このお方の使命の性質を熟考するとき、一つ一つの新たな探求が、今まで明らかにされてきた以上に深く興味深いことを明らかにする。主題は无尽蔵である。キリストの受肉、このお方の贖罪の犠牲と仲保の働きの研究は、勤勉な生徒の思いを時が続く限り従事させるのである。(福音宣伝者 251)

神がこうして肉において表されるとは、実に奥義である。そして聖霊の助けがなければ、わたしたちはこの主題を理解することは望めない。人が学ばなければならぬ最も屈辱的な教訓は、人間の知恵の無価値さであり、自分自身の努力で助けを得ずに神を探そうとすることは愚かだということである。レビュー・アンド・ヘラルド 1906 年 4 月 5 日)

マリヤの息子の人性が神の御子の神性に代わったのであろうか。否、二つの性質は神秘的にひとりの人、すなわち人の子キリスト・イエスのうちに混ぜ合わされていた。このお方のうちに満ちみちた神のかたちが宿っていた。……

これは偉大な奥義であり、贖われた者が昇天するまで、その偉大さをことごとく十分に完全に理解することはない奥義である。そのとき、人に対する神の賜物の力と偉大さと効力が理解されるようになる。しかし、敵はこの賜物を非常に神秘的にして、無価値なものにしようと決意している。」(パウル・コメント [E.G. 初刊本] 5 卷 1113)

わたしたちは贖いの計画の偉大な奥義を説明することはできない。イエスはご

自分に人性を取られた。それはこのお方が人類に手をのべることができるためであった。しかし、わたしたちはどのように神性が人性に覆われたかを説明することはできない。御使は墮落した人類にどのように同情するかを知らないかもしれない。しかし、キリストはこの世に來られて、わたしたちのあらゆる誘惑に苦しみ、わたしたちのすべての悲しみを担われた。(レビュー・アンド・ヘラルド 1889 年 10 月 1 日)

II. 人性と神性の奇跡的な結合

ご自分の王衣と王冠をわきへおき、キリストはご自分の神性に人性を覆われた。それは人間がその墮落した状態から引き上げられ、有利な立場におかれるためであった。キリストはこの地上に天の宮廷でもっておられた栄光をもって來ることもおできになった。罪深い人間はその光景に耐えることができないのであった。このお方はご自分の神性を人性の衣で覆われたが、ご自分の神性から離れたわけではなかった。神であり人であられる救い主は、墮落した人類の頭として立つために、幼年時代から成人時代まで彼らの経験にあずかるために來られた。人間が神性にあずかる者となるために、このお方はこの地上に來られて、完全な従順の生活を送られた。(同上 1905 年 6 月 15 日)

キリストのうちに神性と人性が結合していた。神性は人性によって低くされたものではなかった。神性はその場所を保っていたが、人性は神性と結合することによって、荒野におけるもっとも激しい誘惑のテストにも耐え忍ばれた。この世の君は、キリストが長い間断食された後、空腹であったときにやって来て、このお方に石がパンになるように命じてみなさいと言った。しかし、人間の救いのために考案された神のご計画は、キリストが飢えや貧困、そして人間の経験のあらゆる面を知るよう備えられた。(同上 1890 年 2 月 18 日)

わたしたちがこの地上でキリストが赤子になられたことについて考えれば考えるほど、ますますそれは驚くべきものに見えてくる。ベツレヘムの馬ぶねの中の赤子が、どうしてなお神の御子であられるであろうか。わたしたちがそれを理解できなくても、このお方が諸世界を造られたお方が、わたしたちのために無力な赤子になられたことを信じることができる。どの天使よりも高く、天の御座におられ

る御父に等しく偉大であられるにもかかわらず、このお方はわたしたちと一つになって下さった。このお方のうちに神と人が一つになられた。そして、わたしたちが墮落した人類の希望を見出すのはこの事実においてである。肉におけるキリストをながめるとき、わたしたちは人性における神を見て、このお方のうちに神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿を見るのである。(ユース・インストラクター 1895 年 11 月 21 日)

だれも、活発さに輝く子供らしい表情を見ながら、キリストはまったく他の子供たちと同じようだということはできなかった。このお方は人の肉における神であられた。このお方が仲間に悪いことをするように迫られると、神性が人性を通してひらめき、このお方は断固として拒まれた。瞬時にこのお方は正しいことと悪いことを識別なさり、罪を神のご命令の光のうちににおいて、悪の上に光を反射させる鏡として、律法を掲げられた。(同上 1898 年 9 月 8 日)

人間家族の一員として、このお方は死すべき運命にあったが、神として、このお方は世界の命の源であられた。このお方はその神性のうちに、いつでも死の進行をとどめ、その支配下に入ることを拒むことがおできになった。しかし、このお方は自発的にご自分の命を捨て、そうすることによって、このお方は命を与え、不死を明るみに出すことがおできになるのであった。……これはなんというへりくだりであろう!それは天使たちを驚かせた。舌は決してそれを描写することができない。想像力はそれを把握することができない。永遠の言が肉になることに同意されたとは!神が人となられた!(レビュー・アンド・ヘラルド 1887 年 7 月 5 日)

使徒はわたしたちの注意を自分自身からわたしたちの救いの創始者へ向けさせたいのである。彼はわたしたちの前にこのお方の二つの性質、すなわち神性と人性を提示している。……このお方は自ら人性を取られた。それはこのお方ご自身の行為であった。そして、このお方ご自身の同意によるものであった。このお方はご自分の神性に人性をまとわれた。このお方はつねに神であられたが、神として現れなかった。このお方は崇敬の念を引き起こし、全宇宙の賞賛を呼び起こしてきた神格の現れは覆われた。このお方は地上におられた間、神であられたが、神のかたちを脱ぎ、その代わりに人間のかたちを取り、人の姿になられた。この

お方は人として地上を歩まれた。わたしたちのためにこのお方は貧しくなられた。このお方の貧しさを通して、わたしたちが富む者となるためであった。このお方はご自分の栄光と大権を放棄された。このお方は神であられた。しかし、神のかたちの栄光を一時のあいだ手放された。……このお方は世の罪を負われ、その神聖な魂の上に山のように転がり落ちた刑罰を忍ばれた。このお方はご自分の命を犠牲として明け渡された。それは人間が永遠に死なないためであった。このお方は死なれたが、無理やり死に追いやられたのではなく、ご自身の自由意志によってであった。(同上)

マリヤの息子の人性が神の御子の神性に代わったのであろうか。否、二つの性質は神秘的にひとりの人、すなわち人の子キリスト・イエスのうちに混ぜ合わされていた。このお方のうちに満ちみちた神のかたちが宿っていた。このお方のうちに満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っていた。キリストが十字架にかかれたとき、死んだのはこのお方の人性であった。神格は沈むことも死ぬこともなかった。それは不可能である。(パイヴル・コメンタリ [E.G. 訳] コメント]5 巻 1113)

信仰によってわたしは生きる

The Faith I Live By



12月 「福音の勝利」

ノアの時にあったように

「そしてノアの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起こるであろう。」
(ルカ 17:26)

どの時代にあっても、神がそのしもべによって世界に伝えられた警告は疑いと不信をもって迎えられた。洪水の前の人々の罪惡のゆえに、地が洪水で滅ぼされることになったとき、神は、まず彼らに惡の道を離れる機会を与えるために、ご自分の意図をお告げになった。神の怒りによって彼らが滅ぼされないように、百二十年の間、悔い改めの警告が彼らの耳に発せられた。しかし、彼らはその警告を、たわごとと考えて信じなかった。……

あざける者たちは、自然の事物一相も変わらぬ季節の推移、雨を降らせたことのない青空、柔らかな夜の露に生氣を取り戻した緑の野一を指さして、「彼はたとえ話を語っているのではないか」と叫んだ。彼らは、義の宣伝者を軽べつして、無謀な熱狂家と呼んだ。そして彼らは、これまで以上に快樂の追求に走り、惡の道に進んでいった。しかし、彼らの不信は予告されたできごとが起こるのを妨げはしなかった。……

キリストは、再臨に関して同様の不信があらわされるであろうと言われた。ノアの時代の人々が「洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった」ように、「人の子の現れるのも」そのようであろうと救い主は言われた（マタイ 24:39）。（各時代の斗争闘下巻 27, 28）

オリブ山での主の警告のことばは、幾世紀を経て今日のわれわれに厳肅にひびいてくる。「あなたがたは放縱や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。……これらの起ころうとしている全てのことからのがれ……ることができるよう、絶えず目をさまして祈っていなさい」。（各時代の希望下巻 106）

平和だと叫ぶ者

「人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。」(テサロニケ第一 5:3)

この悪いしもべは、「主人の帰りがおそい」と心の中で思っている。彼は、キリストがおいでにならないとは言わない。彼は主の再臨という考えを嘲笑しない。しかし心の中で、またその行為とことばによって、主の来臨が遅いと宣言する。彼は、ほかの人たちの心から、主はすみやかにこられるという確信を追い出す。彼の影響で、人々の間に独断的で不注意な遅れが生じる。人々の世俗心とまひ状態がますますひどくなる。世俗的な欲望、墮落した思いが心を占領する。悪いしもべは、酔っぱらいといっしょに飲み食いし、世の人々といっしょになって快樂を求める。彼は仲間ものしもべたちを打ちたたいて、主人に忠実な者たちを責め、非難する。……

キリストの来臨はにせ教師たちの不意を襲う。彼らは、「平和だ無事だ」と言っている。エルサレムが陥落する前の祭司たちと教師たちのように、彼らは教会が世俗的な繁栄とほまれを受けることを期待する。彼らは時のしるしをこの事の予表として解釈する。しかし靈感のことばには何とされているだろうか。「突如として滅びが彼らをおそって来る。」……

人々は主の来臨をずっとのちのことにしている。彼らは警告をあざ笑う。「すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」。「あすも、きょうのようであるだろう、すばらしい日だ」という高慢な誇りが表明される(ペテロ第二 3:4, イザヤ書 56:12)。もっと大いに楽しもうというのである。しかしキリストは、「見よ、わたしは盗人のように来る」と言われる(黙示録 16:15)。世の人々が嘲笑して、「主の来臨の約束はどうなったのか」とたずねているその時に、しるしは成就しつつある。彼らが「平和だ無事だ」と叫んでいる時に、突然の滅びがのぞみつつある。嘲笑する者、すなわち真理をこぼむ者が僭越になった時、各方面の金もうけ仕事が原則を無視してくりかえされている時、研究者が聖書以外のあらゆる知識を熱心に求めている時、キリストは盗人のようにこられる。(各時代の希望下巻 103～105)

陸と海でのしるし

「主の大いなる日は近い、近づいて、すみやかに来る。主の日の声は耳にいたい。そこに、勇士もいたく叫ぶ。」(ゼパニヤ 1:14)

わたしたちは時の終わり近くにいる。神の当然の報いである判決がすでに下されているのをわたしは示された。主は、起こるべき出来事についての警告をわたしたちに与えてくれた。……同じ祝福の泉から飲んでいる者は、互いにますます近く引き寄せられる。信者の心に宿っている真理は、祝福された幸福な同化へと彼らを導く。キリストが御父と一つであられるように、ご自分の弟子たちも一つとなるようにというキリストの祈りは、このように答えられる。真に改心したすべての人の心は、この一致のために努力する。

不信心な者には、永続的な不一致を部分的に隠したにすぎない偽りの調和があるであろう。彼らは神のご意志と真理に敵対することにおいて一致するが、その一方その他のあらゆることにおいては、憎しみや張り合い、嫉妬や致命的な争いで、分裂しているのである。(教会への証 5 巻 99 ～ 101)

主は地上からご自分の抑制を取り除きつつあるので、まもなく、死と破滅が起こり、犯罪が増え、貧しい者に対して高ぶってきた金持ちに対する無慈悲で邪悪な働きが増える。神の保護がない者は、どこにも安全な場所や立場を見出さない。人間は傷つけ、殺すために訓練され、最も強力な機械を操作するために自分たちの発明力を用いている。(教会への証 8 巻 50)

主は恐るべく地をふるうために立ちあがられる。四方に混乱が起こるのを見るであろう。幾千の船が海の底にのみ込まれる。艦隊は沈み、幾百万の人命が失われる。不意に火災が起り、人間がどんなに努力してもその火を消すことはできない。地上の宮殿は炎の激しさで一掃される。鉄道事故はますます相次いで起こり、往来の激しい道で一瞬の前ぶれもなく、混乱、衝突、また死が起こる。終末は近く、恩恵期間は閉ざされようとしている。ああ、神を見出すことができる間に神を求め、神が近くにおられる間にこのお方を呼びもとめよう。(青年への使命 80)

天におけるしるし

「いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」(マタイ 24:32, 33)

救い主は来臨のしるしをお与えになっている。のみならず、主はこれらの最初のしるしが現われる時を定めておられる。「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。……」(マタイ 24:29 ～ 31)。

法王による大迫害が終わると、日は暗く月はその光を放つことをやめると、キリストは言明された。次に星が天から落ちるのである。(各時代の希望下巻 97, 98)

こうして、イエスが弟子たちに言われた再臨に関する最後のしるしが、あらわされた。「そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(マタイ 24:33)。これらのしるしのあとで、ヨハネは、天は巻き物が巻かれるように消えていき、地は震い、山と島とはその場所から移され、悪人は恐れて人の子の前から逃げるといふ、その次の大事件を見た。(各時代の争闘下巻 23)

しかしキリストは、来臨の日時をお示しにならなかった。……人の子がふたたびおいでになる正確な日時は神の奥義である。(各時代の希望下巻 100)

もうしばらくすれば、「麗しく飾った王」にお会いするのである。もうしばらくすれば、主はわれらの目から涙を全くぬぐいとってください。もうしばらくすれば、主はわれらを「その栄光のまゝに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さる」(ユダ 24)。だから主は、来臨のしるしをお与えになった時に、「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」と言われた(ルカ 21:28)。(同上 98 ～ 100)

預言を研究しなさい

「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。」(黙示録 1:3)

われわれは、ダニエル書と黙示録に明らかにされている国々の興亡から、単なる外見的、世俗の栄光がどんなに無価値なものであるかを学ばなければならない。今日においても世界にその比を見ないバビロンの権力と壮麗さのすべては、当時の人々にとっては実に堅固で永続的に見えたのであるが、なんと完全に過ぎ去ってしまったことであろう。それは、「草花のように過ぎ去」った(ヤコブ 1:10)。同様にメド・ペルシャ王国も、ギリシャ王国もローマ王国も滅びた。そして神をその基としないものはみな滅びるのである。ただ神のご目的と結合し、神の品性をあらわすものだけが永続することができるのである。神の原則だけが、この世界における唯一の堅固なものなのである。(国と指導者下巻 157)

ダニエル書と黙示録がもっと良く理解できるとき、信者は、まったく異なった宗教経験を持つようになる。彼らは天の開いた門から垣間見て、心の清い者たちの報いとなる祝福が実現するためにすべての人が発達させなければならない品性が心と思いにより印象づけられる。黙示録に表されている事柄を謙遜にまたへりくだって理解しようと努めるすべての者を、主は祝福して下さる。この書は、大きく不滅にかかわるもの、また栄光に満ちたものを非常に多く含んでいるので、この書を熱心に読んで探し求める者は、「この預言の言葉を……聞いて、その中に書かれていることを守る者たち」のための祝福を受ける。黙示録の研究から確実に理解できる一つのこと—それは、すなわち、神とこのお方の民とのつながりは密接であり、決定的であるということである。(牧師への証 114)

聖書研究にもっと時間を割くようにしよう。わたしたちは御言を理解すべきほど理解していない。黙示録の書は、その中に含まれている教えを理解せよとの命令をもってわたしたちに開かれている。……わたしたちが……この書がわたしたちにとって何を意味するかを理解するとき、わたしたちのただ中に偉大なりバイバルが見られるようになる。(同上 113)

欺瞞の最後を飾る一幕

「そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。」(マタイ 24:4, 5)

欺瞞の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう。教会は、救い主の来臨を教会の望みの完成として期待していると長い間公言してきた。今や大欺瞞者は、キリストがおいでになったように見せかける。地上のあちらこちらで、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現われる……「キリストがこられた、キリストがこられた」という勝利の叫びが、空中に鳴り響く。人々が彼をあがめてその前にひれ伏す。……やさしい同情のこもった調子で、彼は、救い主が語られたのと同じ祝福に満ちた天の真理を幾つか述べる。彼は人々の中の病人をいやし、それから、キリストらしくみせかけながら、安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするようにと命じる。……

聖書を熱心に研究し、真理の愛を受けた者だけが、世界をとりこにする強力な惑わしから守られる。(各時代の争闘下巻 398～400)

救い主は……ご自分の民に警告し、再臨のありさまをはっきりと予告された。「にせキリスト……が起って、……だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイ 24:24～27)。この来臨はまねることが不可能である。それは世界じゅうに知られ、全世界の人々が目撃するのである。……

神の民は、自分の感覚的証拠に屈しないほど、今神のみ言葉に固く立っているだろうか。こうした危機においても、彼らは聖書に、しかも聖書だけにすがりつくだろうか。(同上 399, 400)

暴力から救われる

「あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また笛をならして主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心に喜ぶ。」（イザヤ 30:29）

人間の法律による保護が、神の律法を尊ぶ者たちから取り去られると、彼らを滅ぼそうとする運動が、あちこちの国で、いつせいに起こる。……

神の民は、独房の中にいる者たちもあれば、森林や山々の寂しい隠れ家にいる者たちもあるが、なおも神の保護を求めて祈っている。一方、いたるところで、武装した集団が悪天使の軍勢にかりたてられて殺害の準備をしている。……

かちどきや、あざけりや、のろいの声をあげながら、悪人たちの群れが、今にもそのえじきに飛びかかろうとするそのとき、見よ、夜の暗黒以上の深いやみが、地をおおうのである。続いて、……にじが天にかかり、祈っているどの群れをも取り囲むように見える。……

神の民には、「上を見なさい」というはっきりした音楽のような声が聞こえてくる。彼らが目を天に向けると、約束のにじが見える。大空をおおっていた黒い、怒ったような雲が裂けて、彼らは、ステパノのようにじっと天を見つめて、神の栄光と、人の子がそのみ座にすわっておられるのを見る。イエスのこうごうしいお姿の中に、十字架の恥を忍べた時の傷跡を、彼らは認める。そして、主が天父と聖天使たちの前で、「あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」と願われるのを、主のくちびるから聞くのである（ヨハネ 17:24）。「彼らがやって来る！彼らがやって来る！きよく、傷なく、汚れのない者たちが。彼らは、わたしの忍耐のこたばを守った。彼らは、天使たちとともに歩くことができる」と言われる音楽のような勝利に満ちたみ声が、再び聞こえてくる。すると、信仰を固く保ってきた者たちの青ざめふるえていたくちびるが、勝利の叫びをあげる。神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。太陽がその力強い光を放って現われる。しるしと不思議とがあとからあとから現われる。悪人たちはこの光景を、恐れと驚きとをもってながめる。一方義人たちは、自分たちの救いの前兆を厳粛な喜びで迎える。（各時代の大争闘下巻 412～414）

「主イエスよ、きたりませ」

「祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。」(テトス 2:13)

聖書に啓示された最も厳粛で、最も輝かしい真理の一つは、キリストが、贖罪の大きな業を完成するためにふたたび来られるという真理である。……キリストの再臨という教義は、聖書の基調そのものである。……

主の再臨は、各時代において、神の真の弟子たちの希望であった。(各時代の大争闘上巻 385, 389)

家長ヨブは苦難の夜、ゆるがぬ信仰をもって言った。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる。……わたしは肉にあって神を見るであろう。わたしはこのかたを、自分自身で見るであろう。そして、わたしの目がこれを見る。他の者の目ではない」(ヨブ記 19:25 ~ 27 英語訳)。……

また来るという、オリブ山上での救い主の、離別にあたっての約束は、弟子たちの未来を明るく照らし、彼らの心を喜びと希望で満ちし、どんな悲しみも試練もこれを消し去ることはできなかった。苦難と迫害のただ中であって、「大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現」は、「祝福に満ちた望み」であった。……

岩角険しいパトモス島において、愛する弟子ヨハネは「しかり、わたしはすぐに来る」という約束を聞いた。そして、「主イエスよ、きたりませ」という彼の切実な応答は、流浪のうちにある教会の祈りでもあった。(黙示録 22:20) ……

「この古びた世界は、終末から遠くない」とメランヒトンと言った。カルバンは、「キリストの再臨を、あらゆる事件中の最も喜ばしいものとして、ためらわず、熱心に待望するよう」キリスト者に命じ、……「主の再臨を考えることは、わたしには最も楽しく喜ばしいことである」とバクスターは言った。「彼の出現を愛し、祝福された望みを待ち受けることは、信仰のわざであり、聖徒の特質である。」……

この日こそ、すべて信ずる者の贖罪のすべての働きと、彼らの魂の願望と、努力のすべてが完成されるのであるから、すべての信者は、この日を熱望し、待ちかまえていなければならない。「主よ、この祝福された日を早めてください。」(同上 386 ~ 391)

王が自ら来られる

「われらの神は来て、もだされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばれる。」(詩篇 50:3, 4)

王の王は、燃える炎に包まれて、雲に乗って降りて来られる。天は巻物が巻かれるように消えていき、地は、王の王の前に震え、すべての山と島とは、その場所から移されてしまう。(各時代の争闘下巻 420)

イエスは、偉大な勝利者としておいでになる。今度は、恥辱と苦悩の苦い杯を飲む「悲しみの人」ではなくて、天地の勝利者として、生きている者と死んだ者とをさばくためにこられる。「忠実で真実な者」「義によってさばき、また戦うかたである。」そして「天の軍勢が」彼に従う(黙示録 19:11, 14)。数えることができないほどの聖天使の群れが、天の聖歌を歌いながら付き従う。大空は、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの、輝く天使たちで満たされたように見える。この光景は、人間のどんな筆によっても描くことができない。その輝かしさは、どんな人間の頭でも十分に想像することはできない。「その栄光は天をおおい、そのさんびは地に満ちた。その輝きは光のようである(ハバクク書 3:3, 4)。生きている雲が、さらに近づくと、すべての目は、いのちの君をながめる。いまはその聖なる頭を傷つけるいばらの冠はなく、その聖なる額には栄光の冠がある。そのみ顔は、真昼の太陽よりもまぶしく輝く。「その着物にも、そのももにも、『王の王、主の主』という名がしるされていた」(黙示録 19:16)。

イエスを前にして、「どの人の顔色も青く変っている。」神の恵みを拒んだ者に、永遠の絶望の恐怖がおそってくる。「心は消え、ひざは震え、……すべての顔は色を失った」(エレミヤ書 30:6, ナホム書 2:10)。義人たちは、震えながら、「だれが立つことができようか」と叫ぶ。天使たちの歌はやみ、恐ろしい沈黙のひとときがくる。すると、「わたしの恵みはあなたに対して十分である」というイエスのみ声が聞こえる。(同上 419, 420)

昇天のための準備

「信仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼は見えなくなった。彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。」（ヘブル 11:5）

わたしたちは悪の時代に生きている。終わりの時代の危険がわたしたちの周囲で濃くなっている。悪がはびこるので、多くの人々の愛は冷えている。エノクは300年の間神と共に歩んだ。今、時の短さは、義を求める動機として迫っているかのようである。わたしたちが正しい行いをせずにはいられないように、神の日の恐怖を目の前におく必要があるであろうか。エノクの例がわたしたちの前にある。何百年もの間、彼は神と共に歩んだ。彼は墮落した時代に生き、道徳的な汚れが彼の周囲のいたるところにあふれていた。しかし、彼は自分の思いを献身に向け、純潔を愛するようにと訓練した。彼の会話は天来の事柄についてであった。彼は自分の思いがこの水路を走るように訓練し、彼は神性の印象を帯びていた。彼の表情はイエスのみ顔に輝く光で輝いていた。

エノクには、わたしたちと同じように誘惑があった。彼はわたしたちを取り囲んでいるのと同様な義に対して友好的でない社会に取り囲まれていた。彼の呼吸している大気そのものが、わたしたちのと同じように罪と墮落に汚染されていた。しかし、彼は聖潔の人生を送った。彼は彼が生きていた時代に蔓延していた罪によって汚されなかった。同様に、わたしたちも純潔に墮落せずにいることができる。彼は終わりの時代の危険と墮落のただ中で生きる聖徒たちを代表している。彼はその忠実な神への従順のゆえに移された。同様に、忠実な者たち、すなわち生きて残っている人々も移されるのである。彼らは罪深く墮落した世から、天の純潔な喜びへと移される。神の民の道は勝利に向かって上へ前へ進むべきである。（教会への証 2 巻 121, 122）

この世が洪水によって滅ぼされる、直前に、エノクが天に移されたことは、この世が火によって滅ぼされるに先立って、すべての義人が地から天へ移されることを表わしている。聖徒たちは、神の義なる誠に忠実に従ったために、自分たちを憎んだ人々の目の前で、栄光をうけるのである。（生き残る人々 76）

この同じイエスが帰ってこられる

「『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。』」（使徒行伝 1:11）

キリストの昇天後、オリブ山にとどまっていた天使たちは、キリスト再臨の約束を弟子たちにくり返した。「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」（使徒行伝 1:11）。（各時代の斗争闘上巻 387, 388）

悲しんでいた弟子たちへのこのみ約束、すなわち彼らが心から愛していたイエスに再びお目にかかるという約束は、彼らにとって、本当に尊いものであった。このみ約束は、キリストに真に従うすべての者にとってもまた尊いものである。本当にイエスを愛する者は、だれもこのお方が再び来られるのを残念に思ったりはしない。……

イエスが来られる！しかし、人類の苦悩に耳を傾け、罪深い罪人が自分の罪を告白するのを聞いて、彼に許しを語るためではない。なぜなら、その時にはすべての者の判決は生か死かに決定しているからである。罪のうちに生きてきた者は、永久に罪人のままである。聖所におられるイエスに自分の罪を告白し、このお方を自分の友として、このお方の来臨を喜んできた者は、自分たちのすべての罪に対して許しが記されているのである。……

イエスは天へ昇られたありきまで、さらに光輝を増し加えて来られる。このお方は御父の栄光と、道中ご自分に随行するためのすべての聖天使たちを伴って来られる。このお方の聖なるこめかみを刺した残酷ないばらの冠の代わりに、光り輝く栄光の冠が聖なる額を飾る。……主は簡素な縫い目のない上衣ではなく、雪よりも白い、光り輝く上衣をまといわれる。イエスが来られる！しかし、つかのまの君として統治なさるためではない。このお方は死せる義人を呼び起こし、生きる聖徒を栄光の不死の姿に変え、そして聖徒たちと共に、全天の下、御国をお受けになる。……

愛する若い読者よ。イエスにお会いするために徹底的に準備をなさい。これは、このお方が現れるとき、喜びにあふれて、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」（イザヤ 25:9）と叫ぶためである。そのとき、永遠の命はあなたがたのものとなり、あなたがたはキリストと共にこのお方の栄光にあずかる者となって、いつまでもこのお方の栄光に満ちたおほめのみ声を聞き、その美しいみすがたをながめるのである。（エース・インストラクター 1854 年 4 月 1 日）

聖徒一人びとりのための冠

「試鍊を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。」(ヤコブ 1:12)

わたしは、おびたしい数の天使が、都から、輝く冠を持って来るのを見た。それは聖徒たち一人びとりに与えられる冠で、各人の名前が書きこまれていた。イエスが冠をお求めになると、天使たちはそれをイエスのみ前にささげた。そしてイエスはご自身の右手で、それを聖徒の頭に置かれた。同じように、天使たちが立琴を持ってきた。イエスはそれもまた聖徒たちにお与えになった。天使の中の指揮者たちが、最初の調べを奏した。するとみんなが声をあげて感謝とよろこびの歌をうたい、その手はたくみに立琴の糸をあやつり、そのメロディーは豊かな、完全な調べとなって流れた。……

都の中には目を楽しませるあらゆるものがあつた。彼らは至るところに豊かな栄光を見た。それからイエスは、贖われた聖徒たちをごらんになった。彼らの顔色は栄光に輝いていた。イエスは、彼らの上にじっとやさしい目をそそいで、豊かな美しい声でこう仰せになった、「わたしは、自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。この豊かな栄光は永久にあなたがたのものだ。あなたがたの不幸は終った。もはや死もなく悲しみも嘆きもなく、また痛みもないのだ」と。……

それからわたしは、イエスがご自分の民を生命の木につれて行かれるのを見た。……生命の木には大そう美しい実がなっていた。聖徒たちはそれを自由に食べることができた。都の中には荘厳な御座があつて、そこから水晶のように透き通った生命の水の川が流れ出ていた。生命の木はこの川の両側にまたがっていた。川岸には、その他にも美しい木々があつて、……果実をつけていた。

ことばというものはあまりに貧弱で、天国の光景を描写することができない。天国の光景がわたしの前に現われるにつれて、わたしはただ驚嘆するよりほかはない。そのすぐれた荘麗さと、そのすばらしい栄光に心を奪われたわたしは、筆を投げて叫んだ。「ああ、なんという愛!なんという驚くべき愛ぞ」と。どんなことばでほめたたえてみても、天の栄光と比類のない救い主の愛の深さを描写することはできない。(生き残る人々 465, 466)

サタンの監禁

「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手にとって、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき」(黙示録 20:1, 2)

キリストがこられるとき、悪人は、全地の表面から一掃される。すなわち、主イエスの口の息によって殺され、来臨の輝きによって滅ぼされる。キリストはご自分の民を神の都へ連れて行かれ、地には住民がいなくなる。……

全地は荒涼たる荒野のように見える。地震によって破壊された都市や村落の廃墟、根こそぎにされた木々、海から投げ出されたり、地中から引き裂かれたごつごつした岩石が、地の表面にちらばっている。一方、広いほら穴は、山々がその基から裂けてしまった跡を示している。(各時代の大争闘下巻 440, 441)

ここがサタンと悪天使たちにとって、千年間の住居になるのである。ここに彼は閉じこめられて、その荒れはてた地上をさまよい歩き、神の律法に対する自分の反逆の結果を見せられる。彼は、自ら招いたわざわいの結果を、千年の間、存分に味わうことができる。この地上から外へは出られないサタンは、他世界を飛びまわって、墮落したことのないその住民を誘惑したり、妨害したりすることは許されない。この期間中、サタンは極度に苦痛をおぼえる。墮落して以来、彼の悪の能力はたえず働いていた。しかし今、彼はその能力をとりあげられ、放置されるままに、墮落以来自分の果たしてきた役割について回顧し、また恐怖すべき自分の将来を、恐れとおのきをもって待ちうけねばならない。その恐るべき将来において、彼は自分がこれまでやってきたすべての悪について、さばきをうけ、また彼が人に犯させたすべての罪について処罰をうけねばならないのである。

天使たちと救われた聖徒たちの勝利の叫びが、幾万の楽器を奏する音のようにひびきわたるのをわたしは聞いた。彼らは、これから後サタンに苦しめられたり、誘惑されたりすることはなくなるのである。また他世界の住民たちも、サタンの存在と誘惑から救われるのである。(初代文集 467, 468)

わたしたちは御使さえさばく

「あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である。ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。」(コリント第一 6:3)

第一と第二の復活の間の千年間に、悪人の審判が行なわれる。……この時義人は、神のための王、また祭司として支配する。ヨハネは、黙示録の中で次のように言っている。「また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。」「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する」(黙示録 20:4, 6)。パウロが、「聖徒は世をさばく」と予見したのは、この時のことを指しているのである(コリント第一 6:2)。彼らはキリストと共に悪人を審き、その行為を法規の書すなわち聖書と照らし合わせ、それぞれのなしたわざに従って、すべての者に判決を下す。その時、悪人は、それぞれのわざに応じて、受けねばならない苦しみが定められる。そして、それが、死の書の彼らの名のところに記録される。

サタンと悪天使たちも、キリストとその民によってさばかれる。パウロは、「あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である」と言っている(コリント第一 6:3)。また、ユダは、「主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた」と言っている(ユダ 6)。

千年の終わりに第二の復活がある。その時に、悪人はよみがえらせられる。そして、「記された審判」の執行を受けるために、神の前に現われる。こうして、黙示録の記者は、義人の復活を描写したあとで「それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった」と言っている(黙示録 20:5)。そしてイザヤは、悪人について、「彼らは囚人が土ろうの中に集められるように集められて、獄屋の中に閉ざされ、多くの日を経て後、罰せられる」と宣言しているのである(イザヤ書 24:22)。(各時代の大争闘下巻 444, 445)

神の律法を犯すことに対する罰は罪人を贖うために払われた代価に比例している。キリストを通して救われる者のためには、なんという表現しがたいほどの祝福が備えられていることであろう。また、このお方の大いなる救いを蔑み、拒絶した者に対してはなんと深い苦悩が備えられていることであろうか。(サィズ・オブ・タイムズ 1906 年 10 月 24 日)

新エルサレムの降下

「この御使は、わたしを御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、(大いなる都) 聖都エルサレムが、……神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。」(黙示録 21:10)

千年期の終わりに、キリストは再び地上に帰ってこられる。主は贖われた大群衆を伴い、天使たちを従えてこられる。彼は、恐るべき威光をもっておくだりになる時、死んだ悪人たちに、さばきの執行を受けるためによみがえるよう命じられる。彼らは、海の砂のように、無数の大群となって現われる。第一の復活の時によみがえらせられた人たちと比較して、なんという相違であろう。義人たちは朽ちることのない若さと美しさを着せられていた。ところがこの悪人たちは病氣と死の跡を帯びている。

この大群衆のすべての眼が、神のみ子の栄光にそそがれる。悪人たちはいつせいに、「主のみ名によってこられるおかたに、祝福あれ」と叫ぶ。このような言葉は、イエスに対する愛から出るのではない。彼らは真理の力に迫られて、この言葉をしぶしぶ口から出すのである。悪人たちは、墓に下った時と同じに、キリストに対する憎悪と反逆精神をもって現われてくる。彼らは、過去の生涯の欠点を除くための新しい恩恵期間を与えられるのではない。たとえ与えられても、なんの益もないのである。罪の一生は、彼らの心をやわらげなかった。たとえ第二の恩恵期間が与えられたとしても、第一の恩恵期間の場合と同じように、神のご要求を回避し、神に対する反逆を引き起こすだけである。

キリストはオリブ山におくだりになる。そこはキリストが復活後昇天された場所であり、また天使たちが、主の再臨について約束をくりかえしたところである。預言者はこう言っている。「あなたがたの神、主はこられる、もろもろの聖者と共にこられる。」「その日には彼の足が、東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ。そしてオリブ山は、非常に広い一つの谷によって、……二つに裂け、」「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる」(ゼカリヤ書 14:5, 4, 9)。……新エルサレムが、目もくらむばかりに光り輝いて天からくんだり、きよめられて受け入れ準備の整った場所に落ち着くと、キリストは、ご自分の民や天使たちとともに、その聖なる都にお入りになる。(各時代の大争闘下巻 446, 447)

イエスの至上権

「それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかかめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。」(ピリピ 2:10, 11)

天と地の全住民が集合している前で、神のみ子の最終的な戴冠式が行なわれる。そして今や、王の王なるイエスは、最高の威厳と力とをもって、神の政府に反逆した者に宣告をくだし、神の律法を犯し、またその民を迫害した者たちにさばきを執行される。……イエスの目が悪人たちの上にそそがれるやいなや、彼らはこれまでに犯した罪の一つ一つを意識する。……

み座の上に十字架が現わされる。そしてちょうどパノラマの光景のように、アダムの誘惑と墮落の場面、救いの大いなる計画における一步一步が、次々に示される。……

全世界の悪人たちは、天の政府に対する大反逆という罪名のもとに神の法廷に告訴される。彼らを弁護する者もなければ、言いわけの余地もない。こうして永遠の死の宣告が彼らに下される。罪の価は高尚な独立や永遠の生命ではなくて、奴隷状態、滅亡、死であることが、今すべての人に明らかになる。……サタンはキリストの栄光と威厳とを見てまひしたようになる。かつては守護のケルプであつた彼は、自分がどこから落ちたかを思い出す。光り輝くセラフ、「黎明の子、明けの明星」が、なんと変わり、なんと墮落したことであろう。……

サタンは、自分から進んで反逆したことによって、自分が天に適しない者になったことを知る。彼は神と戦うために自分の能力を訓練してきた。彼にとっては、天の純潔と平和と調和とはこの上ない苦痛となるであろう。神のあわれみと正義に対するサタンの非難は、今こそ沈黙させられた。彼がエホバに浴びせようと努めてきた非難は、全部彼自身に向けられる。そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める。……大争闘のいつさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と言明する。(各時代の大争闘下巻 450～457)

滅ばされるサタンと悪人たち

「あなたはもろもろの国民を責め、悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。」(詩篇 9:5)

今やサタンは、主権をめざして最後の大きいなる戦いの準備をする。……悪人たちがよみがえり、しかもその大群が自分の味方であることを知って、彼は望みをとりもどし、大争闘に負けてはならないと決心する。……彼はその欺いた部下に対して、自分が驕い主であると主張し、彼らを墓からよみがえらせたのは自分の力であ……るのだと言う。……ついに進軍命令が出され、無数の大軍が行進を開始する。……サタンの軍勢は都を包囲して、突撃の態勢をとる。(各時代の争闘下巻 447～449)

火が天の神のみもとからくだる。地はくずれる。地の深いところに隠されていた武器が引き出される。焼き尽くす炎が、地のすべての裂け目から吹き出す。岩石そのものが火になる。「炉のように燃える日」が来たのである。「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされる」(マラキ書 4:1, ペテロ第二 3:10)。地の表面は、ちょうど溶けたかたまり、巨大な沸騰する火の池のように見える。(同上 459)

サタンと、サタンに加わった者たちはみな断たれるのである。罪と罪人は、根も枝も滅びる(マラキ書 4:1 参照)。サタンは根であり、サタンに従う者たちは枝である。……「彼らは……かつてなかったようになる」(オバデヤ書 16)。(各時代の希望下巻 290, 291)

神に対するサタンの反逆は、彼自身の滅びと、彼の側につくことを選んだすべての者の滅びに終わったことが明らかとなる。彼は、罪を犯すことによって大きな幸福を味わうことができると主張してきた。だが「罪の支払う報酬は死である」ことが明らかとなる(ローマ 6:23)。……罪は終わりを告げ、それから生じたわざわいと滅びもなくなる。詩篇作者は言っている、「あなたは……悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。敵は絶えはてて、とこしえに滅び……ました」(詩篇 9:5, 6)。(人類のあけぼの上巻 402)

彼(サタン)は、救いの計画を粉碎したいと思っていた。しかし、それは、あまりにも深くすえられていた。……彼自身が、ついに、死ななければならないこと、そして、彼の王国をイエスに引き渡さなければならないことを知った。(初代文集 303)

神の正義

「わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。」(ヨハネ 12:48)

悪人たちは地上の報いを受ける。……一瞬にして滅ぼされる者もあり、幾日も苦しむ者もある。みなその行為によって罰せられるのである。義人の罪は、悪の元祖であるサタンの上にうつされ、サタンが彼らの刑罰を負うのである。こうしてサタンは、自分自身の反逆のためばかりでなく、神の民に犯させた罪のために刑罰を受けさせられる。サタンの刑罰は、彼が欺いた人々の罪よりもずっと重い。サタンの欺きに陥った人々がみな滅びてからも、サタンはまだ生き残って苦しみを受ける。

きよめの炎によって、悪人はついに根も枝も滅ぼされる。サタンが根であり、彼に従った者が枝である。神の正義は満ち足り、聖徒と天使の全軍は声高らかにアーメンとなえる。

地が神の報いの火につつまれているときに、義人は安全に聖都にとどまっている。第一の復活にあずかった者に対しては、第二の死はなんの力もない(黙示録 20:6)。神は悪人にとっては焼きつくす火であるが、神の民にとっては太陽また盾である(詩篇 84:11)。(生き残る人々 481)

賛美と勝利の歌が、忠誠な全宇宙からわき起こる。「大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなもの」が、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、主なる支配者であられる」というのが聞こえる(黙示録 19:6)。……

悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。地獄の火が永遠に燃え続けて、贖われた者たちの前に罪のおそろべき結果をいつまでも示す、などというようなことはないのである。……

罪によって失われた一切のものは回復された。……地上が贖われた者たちの永遠のすみかとなると、地を創造された時の神の最初の目的が達成される。「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」(詩篇 37:29)。(各時代の斗争闘下巻 460～463)

永遠の重い栄光

「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。」(コリント第二 4:17)

わたしは天の栄光と忠実な者のために蓄えてある宝とを示された。すべてのものは美しく栄光に輝いていた。天使たちは美しい歌をうたうのであったが、歌をやめては、冠を脱ぎ、愛するイエスの足もとに輝く冠を投げ出して、美しい声で、「栄光があるように、ハレルヤ!」と叫ぶのであった。わたしは小羊に対する賛美とほまれの歌を彼らと一緒に歌った。そして、彼を賛美するため口を開くたびに、わたしは自分を取り巻く言うに言われぬ栄光を感じた。それは、永遠の重い栄光をあふれるばかりに得させるものであった。「神を愛し、神の戒めを守って、最後まで忠実に仕える少数の残りの民は、この栄光にあずかり、常にイエスの前にいて、聖天使たちと共に歌うのである」と天使が言った。

それからわたしの目は栄光を離れて、地上の残りの民に向けられた。天使は彼らに言った。「……準備しなさい。準備しなさい。準備しなさい。あなたがたは、今までよりもっと準備しなければならない。いきどおりと激しい怒りが容赦なくあらわされる主の日がやって来て、地上を荒廃させ、地上から罪人を滅ぼし去るのである。すべてを犠牲として神にささげなさい。自分も、財産も、すべてを生きた供え物として、神の祭壇の上にのせなさい。栄光に入るためには、すべてのものが必要である。あなたがたは、自分のために盗人が近づかず、さびもつかない天に宝を蓄えなさい。あなたがたは、将来、キリストと共に彼の栄光にあずかろうと思うならば、この地上でキリストの苦難にあずかる者でなければならない。」

もし苦難によって、天国が得られるとするならば、それはまことに安価なものである。われわれは常に自己を否定し、日毎に自己に死に、イエスだけをあらわすようにし、絶えず彼の栄光を心に留めていなければならない。(初代文集 141～143)

救いの働きは、好きなときにつかんだり、離したりする子供の遊びではない。最後に勝利を得させるのは、確固とした目的とためめ努力である。救われるのは、最後まで耐え忍ぶ者である。永遠の命を得て、不死の報いを受けるのは、忍耐強く善行を行い続ける人々なのである。(教会への証 2巻 101, 102)

エデンの生活を送る

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。」(黙示録 21:1)

天は学校である。その研究の分野は宇宙であり、その教師は無限の神である。この学校の分校がエデンに設けられたのであった。救済の計画が成就されると、教育は再びエデンの学校にもどるのである。……

パトモスの預言者ヨハネは、来世の学校の所在についてこう言っている。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、……また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た」(黙示録 21:1, 2)。……

エデンの生命の木は条件つきで与えられたが、結局とり去られてしまった。しかし来世の賜物は絶対的かつ永久的である。……

神のみ前に立ち帰った人類は、天地が造られた時と同じようにふたび神から教えられる。「わが民はわが名を知るにいたる。その日には彼らはこの言葉を語る者がわたしであることを知る。わたしはここにおる」(イザヤ 52:6)。……

宇宙のすべての宝は神の子らの研究のために開放される。言いしれない喜びをもってわれわれは墮落していない存在者たちの歓喜と知恵にあずかるのである。われわれは、神のみ手のわざを熟視して長い年月の間に得た宝にあずかるのである。そして永遠の年月がたつにつれて、ますます輝かしい啓示が与えつけられるであろう。「わたしたちが求めた思うところのいっさいを、はるかに越え」るものが、永遠から永遠にわたって神の賜物として与えられるであろう(エペソ 3:20)。……

地上の生活は天上の生活の始まりである。地上の教育は天の原則の初歩である。この世の人生の働きは来世の人生の働きのための訓練である。品性においても、聖なる奉仕においても、現在のわれわれの姿は、来世におけるわれわれの姿をうつした確かな影である。(教育 352～354, 359)

栄光の明るい光線

「その輝きは光のようであり、その光は彼の手（脇）からほとぼしる。かしこにその力を隠す。」（ハバクク 3:4）

サタンは首尾よく人間を服従の道から離反させたために、「この世の神」となった（コリント第二 4:4）。かつてアダムのものであった統治権が、横領者の手に移った。しかし神のみ子は、この世界に来て罪の価を払い、こうして人類を贖うだけでなく、失われた統治権をも回復しようとなさったのである。……使徒パウロはそれ〔失われた統治権の回復〕を「神につける者が全くあがなわれ（買われた所有物の贖い）」と言っている（エペソ 1:14）。（国と指導者下巻 280）

罪のために、人間だけでなく、地も悪者の支配下に陥った。そして、地も贖罪の計画によって、回復されなければならなかった。（人類のあけぼの上巻 59）

カルバリーの十字架は、律法が不変なものであることを宣言していると同時に、罪の価は死であることを宇宙に宣言している。「すべてが終わった」との救い主の臨終の叫びによって、サタンに対するとむらいの鐘が鳴らされた。長い間継続されてきた大争闘はここに決定し、悪の最終的な根絶が確実となった。神のみ子は、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼすため、自ら墓の門をくぐられた（ヘブル 2:14）。ルシファーは自分が高い地位にのぼりたいとの望みから、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう」と言ったのであったが、神はこう宣言しておられる。「わたしは……あなたを地の上の灰とした。……あなたは……永遠にうせはてる。」……（イザヤ書 14:13, 14, エゼキエル書 28:18, 19）。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。……」（黙示録 21:1）。……あらゆる災いの跡は一掃される。

思い出させるものがただ一つある。われわれの贖い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。主の傷ついたみ頭に、その脇腹に、その手と足に、罪の残酷なしわざの唯一の跡がある。預言者ハバククは栄光のキリストを見て、「その光は彼の手（脇腹—英語訳）からほとぼしる。かしこにその力を隠す」と言っている。（各時代の争闘下巻 242, 460～462）

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。（同上 433）

もはや死もない、永遠に！

「人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。」(黙示録 21:4)

贖われた者の家郷には、涙も葬儀の列も喪章もない。「そこに住むもののうちには『わたしは病気だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪が許される」(イザヤ 33:24)。永遠の世界がめぐる時、幸福の豊かなうねりがあふれ、深まる。
.....

祝福された来るべき世界をこの上なく熱心に考えよう。わたしたちの信仰が闇の雲を貫き、世の罪のために死んでくださったお方を見つめよう。このお方はご自分を受け入れ、信じるすべての者のためにパラダイスの門を開かれた。……わたしたちに激しい痛みを与える苦悩を教訓とし、キリストにおける高い召しという賞与に向かって押し進むことを学ぼう。主がまもなく来られることを考えて勇気を出そう。この希望でわたしたちの心を喜ばせよう。……

わたしたちは家路についている。わたしたちのために死んでくださるほどわたしたちを愛して下さったお方は、わたしたちのために都を建てて下さった。新エルサレムがわたしたちの休息の場所である。神の都に悲しみはない。嘆き悲しむ声も、砕かれた希望や葬られた愛情への哀歌も、もはや聞こえない。まもなく、重苦しい衣は婚礼の衣装にとって代えられる。まもなくわたしたちは、わたしたちの王の戴冠式に臨席する。自分の生命がキリストと共に隠されている者、この地上で信仰の良き戦いを戦ってきた者は、神の王国で贖い主の栄光に輝く。

永遠の生命というわたしたちの希望が集中しているお方にお会いする日は遠くない。主のご臨在のうちにあれば、この世の試練や苦しみは無きに等しい。……見上げよ。見上げよ、そしてあなたの信仰をたえず増し加えよ。この信仰があなたを狭い道へ導き、神の都の門をくぐり抜けて、はるかかなたへ、すなわち贖われた者たちのための広く限りない未来の栄光へ導くようにしなさい。(教会への証 9 卷 286 ～ 288)

世界の首都

「都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。」(黙示録 21:23)

そこには栄化された新しい地の首都、新エルサレムがある。それは「主の手にある麗しい冠」「あなたの神の手にある王の冠」である(イザヤ書 62:3)。「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった」(黙示録 21:11)。(各時代の大争闘下巻 464, 465)

都の大通りは純金で敷き詰められ、……都の門は真珠がはめこまれた金で作られていた。地上で得た富は、焼き尽くされるであろう。……そこには盗人は近づかない。また虫やさびがそこなうこともない。……あなたは失う危険のない不朽の宝を持つのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1878 年 1 月 31 日)

神の都には「夜は、もはやない。」休みの必要な者や、休みをほしいと思う者はだれもいない。神のみこころを行ない、そのみ名を賛美するのに、疲れることがない。いつも朝のすがすがしさを感じ、それは決して尽きることがない。「あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照らされるからである(黙示録 22:5)。太陽の光線の代わりに、目にまぶしくない光が与えられるが、その明るさは今の真昼の輝きよりもはるかにまさっている。神と小羊の栄光は、衰えることの無い光をもって神の都に満ちあふれる。贖われた者たちは、太陽の無い、しかもとこしえの昼の光の中を歩むのである。

「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである」(黙示録 21:22)。神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている」(コリント第一 13:12)。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔を合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである。(各時代の争闘下巻 465)

すべてを犠牲にしても、わたしたちは天国を得、神のご性質にあずかる者となることを決心しよう。(サインズ・オブ・タイムズ 1888 年 1 月 27 日)

対照的な二つの世界

「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。」(コリント第一 2:9)

永遠の世界の栄光がわたしの前に開かれた。わたしはあなたに、天国は勝ち取る価値があると言いたい。贖われた者や聖天使たち、そして、世の贖い主であられるイエス・キリストとの交わりにふさわしい者となること、あなたの人生の目的となるべきである。もしわたしたちが天の都を一目見ることができるなら、二度と地上に住みたいとは思わなくなるであろう。地球には美しい風景があり、わたしはこれらの自然界にあるうわしい眺めをみな楽しんでいる。わたしはこれらの景色から創造主を連想する。しかしもし、わたしが神を愛し、彼の戒めを守るなら、これよりはるかにまぎった、永遠の重い栄光がわたしのために天国に用意されていることをわたしは知っている。(サイズ・オブ・タイムズ 1889 年 4 月 8 日)

新天新地においては、われわれの眼をくもらせていた覆いが取り除かれる。顕微鏡でちらつとのぞいた美しい世界がまのあたりにながめられ、望遠鏡を通してはるか遠くに見えた天の栄光がまのあたりに仰がれる。全地は罪の傷あとを取り除かれて主なる神エホバの美しさにつつまれて現われる。そのとき、なんというすばらしい研究の分野がわれわれの眼前に開かれることであろう。そこでは科学の学徒が創造の記録を読んでも悪の法則の名残はどこにもみあたらない。自然の声の音楽に耳をかたむけても、嘆きの音いろや悲しみの低音はきかれない。すべての被造物の中に一つの筆跡だけが目につき、広大な宇宙に神のみ名が大きく書かれているのが見えるだけで、地にも海にも空にも悪の面影は何一つ残っていない。(教育 354, 355)

救われた者の家庭を考えてみよう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどのりっぱなものであることをおぼえよう。神は自然界を美しく飾っておられるが、それでも、わたしたちは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのである。(キリストへの道 117)

義人にあたえられる報賞がどんなものであるかを人間のことばで説明しつくすことはできない。それはただ目に見る人だけが知ることができる。限りある人知では、神のパラダイスの栄光を理解することはできない。(生き残る人々 482, 483)

天の祝福

「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」（黙示録 21:7）

だれも天国に偶然に入ることはない。だれも目隠しされて天国に行くことはない。もし人が時間をとって考えるなら、自分が細くて狭い道にいるか、それとも死と地獄へと導く広い道にいるのかを、だれでも知ることができる。（バィブル・エコー 1878 年 1 月 31 日）

もしもわたしたちが神の御言を常に食することによって、キリストの宗教を受け入れないなら、神の都に入る資格が与えられることはない。世的な食物で生き、世俗的な事柄を愛するように自分の嗜好を教育してきたなら、わたしたちは天の宮殿にふさわしいものとはならない。わたしたちは天国をめぐる純粋な天の流れの真価を味わうことができない。天使の声や彼らの立琴の調べに満足しない。天の科学はわたしたちの思いに、不可解なものとなる。わたしたちはキリストの義に飢え渇く必要がある。わたしたちはキリストの恵みの改変させる感化力によってかたどられ、形成される必要がある。わたしたちが天の御使たちとの交わりにふさわしい者となることができるためである。（ビュー・アソッド・ヘアルド 1897 年 5 月 4 日）

わたしたちは未来と天国の幸福について見解を持たなければならない。……贖われた者たちはそこで、高く掲げられた救い主に自分たちを導いてくれた人々に挨拶する。……闘いは終わった。あらゆる苦難と争闘は終わりを告げた。贖われた者が神の御座の回りに立つとき、勝利の歌が全天を満たす。（教会への証 8 巻 44）

そのとき、諸国民は天の律法以外どのような戒めも持たない。すべての者が幸福な、一致した家族となり、讃美と感謝の衣を身にまとう。……この光景を見て、明けの明星は共に歌い、神とキリストがご一緒に「もはや罪もなく、死もない」と宣言なさる時、神の子らは喜びの声をあげる。（同上 42）

わたしたちは天国のこと、すなわち麗しい天国のことを話す習慣を持ちたいものである。神が生きておられる限り続く生命の話をしなさい。そうすれば、あなたは小さな試練や困難を忘れてしまうであろう。心が神に引きつけられるようにしなさい。（ヒストリカル・スカッチ 146）

未来の生活についての思索

「彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。」(マルコ 12:25)

今日、新しい地で結婚や誕生があると信じて口に出す者がいる。しかし、聖書を信じる者はそのような教理を受け入れることはできない。新しい地で子供が生まれるという教理は「預言の確かな言葉」ではない。キリストのみ言葉は誤解の余地がないほどはっきりしている。彼らは永久に新しい地での結婚や誕生についての質問に決着をつけるべきである。死からよみがえる者も死を見ることなく移される者もめとったり、とついだりすることはない。彼らは神に仕える天使のような者であり、天の王家の一員なのである。

キリストのこのはっきりした宣言に反する見解を持つ人々にわたしは告げたい。そのような事柄に関しては沈黙こそ雄弁であると。神がみ言葉の中でわたしたちに知らせておられない事柄に関して、仮説や理論をほしいままにするのは僭越である。わたしたちは自分たちの未来の状態に関して根拠のない推測に入り込む必要はない。……

「み言葉を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても」(テモテ第二 4:2)。土台に木や草やわら一だれの益ともならないあなた自身の憶測や推測—を持ってきてはならない。

キリストはわたしたちの救いに必要な真理を与えずにおくようなことはなさらない。明らかにされている事柄は、わたしたちと子孫のためであるが、明らかにされていない事柄に関して教理をつくるためにわたしたちの想像力を働かせることは許されていない。

主は来世におけるわたしたちの幸福のためにあらゆる用意をして下さっている。しかし、主はこれらの計画に関しては啓示しておられないので、わたしたちはそれらについては推測をすべきではない。また、わたしたちはこの世の状態で来世の状態を推し測るべきでもない。……霊的な作り話が多くの者をとりこにすることをわたしは示された。……きよくない空想にふけているすべての人々に、わたしは「止めなさい」と言いたい。キリストのために、ただちにいまいるところで止めなさい。あなたは禁じられた地に立っている。(医事伝道 99 ～ 101)

天国は地上で始まる

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ 11:28)

天国はこの地上で始まるのである。(教会への証 7 巻 131)

キリストをみことば通りに信じ、自分の魂をキリストの守りにゆだね、その生活をキリストの命令に従わせる者には、平安とおだやかさがある。イエスがそのご臨在によって彼らをよこばせてくださるとき、この世のどんなものも彼らを悲しませることができない。ただ黙々として従うことに完全な休みがある。「あなたは全き平安をもってころざしの堅固なもの(思いがあなたにとどまっている者)を守られる。彼はあなたに信頼しているからである」と主は言われる(イザヤ書 26:3)。われわれの生活は混乱しているようにみえるかも知れない。しかし賢明な巨匠であられる神に自分自身をまかせるとき、神はご自身の栄えとなる生活と品性の型をつくり出される。こうしてキリストの栄光すなわちキリストの品性をあらわす人は、神のパラダイスに受け入れられる。新しくされた人類は、白衣を着て神とともに歩むのである。彼らにその価値があるからである。

われわれがイエスを通して休みにはいるとき、天国はこの地上に始まる。わたしのもたにきて、わたしに学びなさいとのイエスの招きに応じてみもとに行くとき、われわれの永遠のいのちが始まる。天国はキリストを通してたえず神に近づくことである。幸福な天国にいればいるほどますます栄光がわれわれに示されるであろう。神について知れば知るほど、われわれの幸福はまし加わるであろう。(各時代の希望中巻 53)

主の民が柔和と優しさに満たされるとき、彼らの上にはためく主の旗が愛であり、主の果物は彼らの味覚に甘いことを悟るようになる。彼らは地上で天国を作り、その中で上なる天国への準備をするのである。(教会への証 7 巻 131)

この世にあつてイエスとともに歩むとき、われわれはイエスの愛に満たされ、イエスのご臨在に満足することができる。この世にあつてわれわれは、人間の性質の耐えられることをすべて受けることができる。だがこうしたことは来世に比較するとき、もののかずではない。そこでは「それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。……御座の正面にいます小羊は彼らを養い、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。」(黙示録 7:15～17)。(各時代の希望中巻 53, 54)

実際の場所である天国

「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる。」(イザヤ 32:18)

未来の嗣業をあまりにも物質的なものに思わせはしないかとの恐れから、それをわれわれのすまいとして見るようにと教えられている真理そのものを霊的なものにしてしまう人が多い。キリストは弟子たちに、わたしはあなたがたのために父の家に住むところを備えに行くのだとはっきり言われた。神のみ言葉の教えを受け入れる者は、天のすまいについて全く無知ではない。……

聖書の中では、救われた者の嗣業が「ふるさと」と呼ばれている。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごとにその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖われた者たちのために備えられた道の上に影を投じている。広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となって盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であった神の民が、そのすまいを見いだすのである。

「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる。」「暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれず、あなたはその城壁を『救』ととなえ、その門を『誉』ととなえる。」「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない……わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである」(イザヤ書 32:18, 60:18, 65:21, 22)。

そこにおいて、「荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、」「いとすぎは、いばらに代って生え、ミルトスの木は、おどろに代って生える」(イザヤ書 35:1, 55:13)。「おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、……小さいわらべに導かれ」……と神は言われる(イザヤ書 11:6)。(各時代の
大争闘下巻 463, 464)

永遠の生命のための競走

「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。」（ヘブル 12:1）

ヘブル人への手紙の中に、永遠の命を得ようとしているクリスチャンの競走の特徴は、一意専心その目的に向かって進むことだと指摘されている。……ねたみ、悪意、邪推、悪口、貪欲などは、クリスチャンが永遠の命をめざす競走に勝利するために、捨て去らなければならない重荷である。われわれを罪におとし入れ、キリストのみ栄えを汚すような習慣や行為は、みな、どんな犠牲を払ってでも捨て去らなければならない。天の祝福は、正義の永遠の原則を犯している人に与えられることはない。一つの罪でも心に抱いているならば、品性を墮落させ、他の人々を誤った道におとし入れるのに十分なのである。

「もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわらになって命に入る方がよい。……もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい」と救い主は言われた（マルコ 9:43, 45）。もし、体を死から救うために、足や手を切り捨て、目を抜き出さなければならないとしたら、クリスチャンは、魂を死に至らせる、罪を捨て去るために、どれほど熱心にならなければならないことだろう。

古代の競技の選手たちは、克己と厳しい訓練に服したからといって、必ず勝利を得るのではなかった。……

クリスチャンの戦いは、そのようなものではない。条件に従った者は、競走の終わりにおいて、だれひとりとして失望におちいることはない。真剣に耐え忍ぶ者は、ひとりとして失敗することはない。それは、いちばん速い者のための競走ではなく、いちばん強い者のための競争でもない。最も強い聖徒とともに最も弱い聖徒も、永遠の栄光の冠を受けるのである。すべて、神の恵みの力によって、自分たちの生活をキリストのみこころに一致させる者は、勝利するのである。（患難から栄光へ上巻 336, 337）

魂の勝利者に対する報い

「賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。」(ダニエル 12:3)

罪のために制限されてはいるものの、この地上の人生における最大の歓喜と最高の教育は奉仕の中にある。罪のある人間としての制限に拘束されない来世においても、奉仕の中に最大の歓喜と最高の教育が見いだされる。(教育 360)

「もしある人の建てた仕事が……残れば、その人は報酬を受ける」(コリント第一 3:14)。忠実な働き人が神と小羊の御座の周りに集まるとき、与えられる報酬は栄光に満ちたものである。……彼らはキリストと苦しみを共にし、贖いの計画で主と共に働く共労者であったので、神の王国で救われた魂に会う喜びに共にあずかり、そこで、永遠に神をほめたたえるのである。(教会への証 9 巻 285)

天国に到着したら、三つの不思議なことに会おうと言ったクリスチャンがいる。彼はそこで予期しなかった人に出会って驚くであろう。また会うと思っていた人に会わないで驚くであろう。そして何よりも神のパラダイスに、自分のような価値のない罪人が入れたことに最も驚くのである。地上でクリスチャンとして高い地位を占めていた多くの人が御座の周りにいる幸福な群衆の中に見い出されないであろう。知識や才能を持っていながら、争闘や不信心な争いを楽しんでいた者は、贖われた者たちの中に場所がないのである。……彼らは人に称賛されたり、へつらわれたりするために、何か大きな働きをしたいと願ったが、彼らの名前は小羊の命の書に記されなかった。「わたしはあなたがたを知らない」という言葉が、このような人々にキリストが言われる悲しい言葉である。しかし、その生活を、数々の小さな親切の行為や、愛情深く思いやりのこもった言葉で美しくしてきた人、争いや口論からは身を引き、決して人の称賛を受けるために大きな働きをしたことのない人は、小羊の命の書にその名が記されているのを見つけるのである。世は彼らを取るに足りない者と考えたが、彼らは全宇宙の前で神に是認されるのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1890 年 2 月 24 日)

神を知る知識は地をおおう

「彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。」（イザヤ 11:9）

わたしたちが神の御国に入って、そこで永遠に暮らすとき、わたしたちがこの世で遭遇した試練や困難、また困惑はとるに足らないものとなる。わたしたちの生命は神の生命で計られるのである。（世界総会冊子 1903 年 4 月 6 日）

そこでは、不死の者たちが、創造力の驚異、贖いの愛の奥義を、永遠に尽きない喜びをもって研究する。人を誘惑して神を忘れさせるような、残酷で欺瞞的な敵はもういない。すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現われてくる。

宇宙のすべての宝は、贖われた神の民が研究するために開放される。死ぬべき人間という拘束をうけないで、彼らは、はるかに遠い他世界……疲れも覚えず飛行する。言葉では言い尽くすことのできない喜びをもって、地上の子らは、他世界の住民たちの喜びと知恵にあずかる。世々にわたって神のみ手の業を熟視して得られた知識と悟りの宝に、彼らは共にあずかる。……イエスが彼らの前に、贖いの富と、サタンとの大争闘における驚くべき功績とをお示しになると、贖われた者たちの心はいっそう熱烈な献身の念に燃え立ち、いよいよ喜びに満たされて黄金の立琴をかき鳴らし、万の幾万倍、千の幾千倍の声が一つになり、賛美の一大コーラスとなって盛りあがる。……

調和と喜びのただ一つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたおかたから、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる。（各時代の争闘 下巻 466, 467）

研究 6

三重のメッセージ



第一天使のメッセージ

Part V

「神に礼拝せよ」

親になる権利は、彼らが子供を生んだということに見出されます。そして子供は自分の親だからこそ、相応の尊敬を払うべき義務の下にあるのです。同様に人類に対して神となられる権利は、このお方が人類を創造された創造主であられること、そして人類に対するこのお方の支配権とこのお方が人類から相応の尊敬と礼拝をお受けになるべき理由も、やはりこのお方が人類の創造主であられることに見出されます。「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造られたのであります」（黙示録 4:11）。ですから、これこそまさに、神が人を創造されたご目的でありました。「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである。」「わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた」（イザヤ 43:21, 7）。

それゆえもし、創造主ではなく被造物でありながら、なお人の礼拝を要求するならば、それは神ではなく、偽りの神あるいは偶像です。「それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。……あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか。初めから、あなたがたに伝えられなかったか。地の基をおいた時から、あなたがたは悟らなかったか。主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいながのように見られる。主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる。彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、神がその上を吹

かれると、彼らは枯れて、わらのように、つむじ風にまき去られる。聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか。』」（イザヤ 40:18～25）。

「あなたは、ただあなたのみ、主でいらされます。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海と其中的のすべてのものを造り、これをことごとく保たれます。天の万軍はあなたを拝します。」（ネヘミヤ 9:6）。ですから、真の礼拝の根拠は、創造に見出されるのであり、そしてこれこそ、第一天使がそのメッセージの中で宣布している唯一の根拠です。「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」（黙示録 14:7）。「黙示録 14 章には、創造主を礼拝するようにという呼びかけが人々に対してなされている。そして、三重の使命の結果として、神の戒めを守る一団の人々が起こることを、預言は示している。これらの戒めの一つは、神が創造主であることを直接指示している。」（各時代の大争闘 下巻 156）

創造（創世記 2:1～3）—安息日（出エジプト記 20:8～11）—礼拝（黙示録 14:6, 7）、これはすべての被造物が覚えるべきことであり、また彼らは自分の創造主にしかるべき尊敬と感謝を表現するべきです。そしてこれは「すべての人の本分で」す（伝道の書 12:13）。「すべてのものを造られたかたは、神である」（ヘブル 3:4）。

キリストは「礼拝をする者も、霊とまことをもつて礼拝すべきである」と宣言しておられます（ヨハネ 4:24）。「人は、聖なる山や聖なる宮を求めることによって天とのまじわりにはいれるのではない。宗教は外面的な形式や儀式に限定されるのではない。神から出ている宗教だけが神へいたる宗教である。神に正しく仕えるためには、神のみたまによって生れなければならない。みたまは心をきよめ、思いを新たにし、神を知り愛する新しい能力をわれわれに与える。それは神のすべてのご要求によることで従う心をわれわれに与える。これが真の礼拝である。それは聖霊の働きの実である。……魂が神を追い求めるところにはどこでもみたまの働きがあらわれ、神はその魂にご自身をあらわされる。神はこのような礼拝者を求めておられる。神は彼らを受け入れて、ご自分の息子娘にしようと待っておられる。」（各時代の希望上巻 224, 225）

祈りの生涯による礼拝

聖書の中には、過去における神の忠実な礼拝者たちの経験が記録されています。たとえば、エノク（創世記 5:24）、ヨブ（ヨブ 1:1 ～ 4）、アブラハム（創世記 18:19）、ダニエル（ダニエル 6:4 ～ 10）、そのほか多くの人々です。「カナンびとラハブやモアブびとルツのように、偶像礼拝からまことの神の礼拝へ立ち帰った者はみな、神の選民に加えられるのであった。イスラエルは人数がふえるにしたがってその境界をひろげ、彼らの国は全世界を包含するに至るはずであった。」（キリストの実物教訓 268）「主はご自分の民とその家庭で、あるいは彼らがどこにいてもそこにお訪ねになり、特別にご自分のいつくしみ深さを表されることによって、彼らを励まされる。そして神の民はどこにいても、自分たちの天父を礼拝する特権を持っているのである。」（レビュー・アンド・ヘルト 1905 年 11 月 30 日）

「魂の命は神と習慣的に交わるにかかっている。その必要は知られ、心は新鮮な祝福を受けるために開いている。感謝が偽りのない唇からあふれ出る。そしてイエスから受ける新たな活力が、言葉において、活発な慈善行為において、また公の礼拝において表されるのである。心にはイエスに対する愛がある。そして愛が存在するところでは、それは制圧されることなく、かえって自ら表現するのである。密室での祈りがこのうちなる命を支える。神を愛する心は、このお方と交わることを望み、そして聖なる信頼のうちにこのお方により頼むのである。」（私たちの高い召し 5 月 4 日）

礼拝の一部である讃美

「歌は、祈りが礼拝の行為であるのと同様に、宗教的礼拝の一部である。歌を正しく表現しようとするには、歌の精神をよく心に感じなければならない。」（人類のあけぼの下巻 257）

「宗教的な行事の一部分として、歌をうたうことは祈りをささげることと同様に礼拝の行為である。事実、たいていの歌は祈りである。このことを認めるように子供に教えるとき、その子供は、自分が歌う言葉の意味をもっと深く考え、その言葉のもつ力にもっと心を動かされるであろう。」（教育 198）

「神は高くいらせられ、聖なるお方である。そしてへりくだり信じる魂にとって、地上のこのお方の家、すなわちこのお方の民が礼拝するために集まる場所は、天への門である。讃美の歌、キリストの牧師によって語られる言葉は、民を上にある教会のために、すなわちさらに崇高な礼拝のために準備させるため神がお定めになった手段である。」（ユース・インストラクター 1896 年 10 月 8 日）

「救いの科学は、すべての説教の主題、またすべての歌のテーマであるべきで

ある。すべての嘆願の中で、それが注ぎだされるようにしよう。」(伝道 502)

「形式的な礼拝の悪を、強調してもしすぎることはない。しかしまた本物の礼拝の祝福の深さを適切に説明できる言葉もない。……すべての人が声を啓発するために時間をとるようにしよう。それは神の讃美が、耳障りな荒々しくて甲高い調子ではなく、はっきりとしたやわらかい声で歌われるためである。歌う能力は神の賜物である。それを神の栄光のために用いよう。」(教会への証 9 巻 143, 144)

家族の祭壇による神への礼拝

「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守ったからである」(創世記 26:5)。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」(創世記 18:19)。「アブラハムの家には、千人以上の人々がいた。彼の教えを受けて、ひとりの神を礼拝するようになったものは彼の天幕に住むようになった。そして、彼らは、ちょうど学校のように、ここで真の信仰の代表者となるための教育を受けた。こうして、彼の上に、大きな責任が負わせられた。彼は、家族のかしらたちを教育していた。そして、彼の管理の方法は、彼らが治める各家庭で実行されるのであった。」(人類のあけぼの上巻 144)

「神の友であったアブラハムは、わたしたちに立派な模範を残している。彼の一生は祈りと謙遜な服従の一生であった。そして彼は世における光として存在していた。彼は幕屋を張るところではどこでも、そのすぐそばに家族の祭壇を築き、自分の家族のメンバーを朝夕の礼拝に集めた。彼が幕屋を移すとき、祭壇は残った。流浪のカナン人は、その祭壇のそばを通り過ぎると、以前にだれがいたかを知るのであった。そして彼が幕屋を張るとき、祭壇を修理して、いける神に礼拝を捧げた。

……これらの原則が実行されている家庭がある。その家庭では、神が礼拝され、最も真実な愛が統治している。これらの家庭からは、朝夕の祈りが神の御許に芳しい香のように立ち上る。そしてこのお方の憐れみと祝福が朝露のように嘆願する者たちの上に下るのである。……神は、熱心な祈りを、ご自分の豊かな祝福を授けてくださる条件となさった。祈りは、わたしたちをますますイエスに近づける。改心のときにどんなにわたしたちが十分に神に自らを献身していたとしても、個々の義務が生じるたびに、わたしたちが自分たちの献身を新たにするの

でなければ、何の役にも立たない。親愛なる読者よ、毎朝、神に献身しなさい。たとえあなたが時間を作るためには 30 分早く起床しなければならなかったとしても、これをあなたの第一の仕事としなさい。あなたの祈りを「主よ、わたしを全くあなたのものとしてお受け入れください。わたしのすべての計画をあなたのみ前におきます。わたしを今日も御用のためにお使いください。わたしがなしうる任務であればどんなことでも、わたしをお遣わしてください。あなたに誉れを帰すために、あるいは魂をキリストに導くためにわたしが語れることは何であつても、それを語ることができるようにお助けください。」(サインズ・オブ・タイムズ 1884 年 8 月 7 日)

「あまりにも多くの家庭で、祈りがなおざりにされている。親たちは、朝夕の礼拝をする時間がないと考えている。彼らは、植物を繁茂させる輝く日光や雨、聖天使の保護などの豊かな恵みに対して、神に感謝する時間を少しもさくことをしない。彼らは、神の助けと導きを求め、家庭にイエスがおとどまりになるように、祈りをささげる時間を持たない。彼らは、神についても天のことについても考えず、牛馬のように働く。彼らが何の望みもなく、失われることのないように、その贖いとして、神のみ子は生命をお与えになった。人間は、それほど尊い魂を持っている。それなのに、彼らは滅びてしまう獣と同様に、神の大きな恵みに感謝することをしない。

昔の父祖たちのように、神を愛すると告白する者は、どこに天幕を張つても、そこに主の祭壇を築かなければならない。すべての家が祈りの家でなければならぬ時があるとすれば、それは今である。父親も、母親も、自分たちと子供たちのために、謙遜に願いをなし、心を神に向けなければならぬ。父親は、家庭の祭司として、朝夕の犠牲を神の祭壇にささげ、妻と子供たちは、祈りと賛美に加わろう。イエスは、そうした家庭に喜んでとどまられる。

すべてのクリスチャンの家庭から、清い光が輝き出なければならない。愛は、行動に現わされるべきである。愛は、家庭のすべての交わりにあふれ出て、思いやりとおだやかさと、自分を忘れたやさしさとなってあらわれるべきである。この原則が実行されている家庭がある。それは、神が礼拝され、真の愛が支配している家庭である。これらの家庭から、朝夕の祈りはこうばしいかおりのように、神のみもとにのぼり、神の恵みと祝福は朝露のように祈る者の上に降るのである。

よく治められたクリスチャンの家庭は、キリスト教の真実性を支持する力強い論証で、無神論者もこれに反論できない。こうして、家庭が子供に感化を及ぼし、アブラハムの神が彼らとともにおられることが、すべての人にわかる。もし、クリスチャンといっているものの家庭が、宗教的に正しい型のものであれば、それは、

非常によい感化を与える。彼らは、真に「世の光」となる。」(人類のあけぼの上巻 148～149)

「親は真剣で熱心な祈りによって、子供たちの周りに垣をめぐらせるべきである。彼らは神が自分たちと共に宿ってください、聖天使たちが自分たちと自分の子供たちをサタンの残酷な力から守ってくださることを完全に信じる信仰をもって祈るべきである。

すべての家庭において、決められた時間に朝夕の礼拝がもたれるべきである。親が食事の前に自分の子供たちをまわりに集めて、天父に夜の間の保護を感謝し、そして昼の間にこのお方が助け、導き、見守ってくださるように願うことは、なんとふさわしいことであろう。また、夕べには、親と子供がもう一度主の前に集まって、過ぎ去った日の祝福を感謝することは何とふさわしいことであろうか。

父親が、あるいは彼が不在の場合には母親が、礼拝を取り仕切り、興味深く、容易に理解することのできる聖句を選ぶべきである。礼拝は短くあるべきである。長い章が読まれたり、長い祈りが捧げられたりすると、礼拝は飽き飽きしたものとなる。そして終わるときには、やっと終わったというような気持ちになるものである。礼拝の時間が無味乾燥で退屈なものとなるとき、あまりにもつまらなくて関心がないために、子供たちが嫌がるようになると、神は辱められる。

父母の方々、礼拝の時間をきわめて興味深いものとしなさい。この時間が一日の中で一番喜びを与える楽しい時間となつてはいけな理由はどこにもない。礼拝の準備のためにちょっと心を配るだけで、あなたはそれを本当に興味深く益の多いものとすることができる。ときどき、礼拝に変化をつけなさい。読まれた聖句に関する質問があつてもよいし、折にかなった心からのコメントが一言二言あつてもよい。讃美の歌を歌うのもよい。捧げられる祈りは短く、要点を得ているべきである。祈る人は、単純で熱心な言葉で、神のいつくしみ深さのためにこのお方を讃美し、またこのお方に助けを求めなさい。状況が許せば、子供たちも朗読や祈りに加えなさい。永遠だけが、このような礼拝の時間に伴う善を明らかにすることができる。」(教会への証 7 巻 42, 43)

「聖書を読むとき、祈るとき、証をするとき、はっきりと明確な言葉で語ることがどれほど必要なことであろうか。家庭礼拝の中で、顔を下に向けて頭をたれ、あたかも長患いから回復したばかりであるかのように低く、弱々しい声で語るために、どれほど多くのことが失われていることであろう。しかし家庭礼拝が終わったとたんに、祈りの中では人が聞こえるくらいの大きな声で話すことのできなかった人々が、はっきりと明確な声で話し、話している内容が聞き取りにくいという

ようなことはないのである。このように口にされた祈りは密室での祈りにはよいが、しかし、公の礼拝にはふさわしくない。なぜなら、彼らと共に集まっている人々が、何が語られているのかわからなければ、彼らはアーメンと言うことができないからである。」(クリスチャン教育 127)

集会に出席することによる礼拝

「そのとき、主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞かれた。そして主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のために、主の前に一つの覚え書がしるされた。」(マラキ 3:16)

「祈りは努めてしなければならない。何物にもじゃまされてはならない。イエスとあなたの魂との交わりをつねに保つことができるよう全力を尽さねばならない。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばならない。神とほんとうに交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できるかぎりの利益を得ようと思って熱心である。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていく。」(キリストへの道 134)

「神の御霊が心に働かれ、魂の宮をその世俗や娯楽に対する愛好心という汚れから清めてくださるときには、みな祈祷会に出席し、自分たちの義務を忠実になし、できるかぎりの利益を得ようと思って熱心である。」(教会への証 4 巻 461)

「かつて表したことのないほどの熱心さをもって永遠のために準備しなさい。あなたの思いを教育し、聖書を愛し、祈祷会を愛し、瞑想の時間を愛し、そして何よりも、魂が神と交わる時間を愛するようにしなさい。もしあなたが上にある住まいで天の聖歌隊と一体になりたいと思うなら、天を中心に考える人になりなさい。」(教会への証 2 巻 267)

「すべての人が短く祈ることをクリスチャンの義務だと感じるべきである。世界中を行きめぐることなく、ただ主にあなたの望むことだけを告げなさい。個人的な祈りでは、望むままに長く、また好きなだけあからさまに祈る特権がすべての人にある。彼らは自分のすべての親戚や友達のために祈ってもかまわない。密室が、自分たちのあらゆる個人的な困難や試練、また誘惑を語るべき場所である。神を礼拝するための一般の集会は、心のプライバシーを公開する場所ではない。

一緒に集まる目的は何であろうか。それは神に情報を与え、このお方にわたしたちの知っていることを全部祈りの中で告げることによって、このお方を教えることであろうか。わたしたちは思想や気持ちを交えることによって互いに啓発し、ま

た互いの希望や志を知ることによって力と光と勇気を得、そして信仰のうちに捧げられるわたしたちの熱心で心からの祈りによって、わたしたちが自分たちの力の源であられるお方から回復と活力を受けるためである。これらの集会は最も尊い集会となり、宗教的な事柄にいくらかでも関心のあるすべての人にとって興味深いものとなるべきである。

わたしは自分たちの問題を個人的な祈りのうちに神に携えていくことをせず、それらを祈祷会のためにとっておいて、そこで数日間分の祈りをする人たちがいるのではないかと案じている。そのような人は、集会もしくは祈祷会殺しと命名することができる。彼らは一筋の光も放射しない。彼らはだれも啓発しない。彼らの冷たく凍りついた祈りと長々とした後退させるような証は影を投げかける。全部終わったときにはみんなほっとするが、彼らの祈りや勧告が集会にもたらした凍るような闇を払拭するのはほとんど不可能である。わたしが受けた光によれば、わたしたちの集会は霊的で社交的なものであるべきであり、そして長すぎではない。遠慮、誇り、虚栄、人に対する恐れは、家においてこなければならぬ。些細な相違や偏見を、自分と一緒にこれらの集会に持ってきてはならない。自分たちの光を共に携えてくることによって、あらたに活気と活力を受けようと集まる男女の心には、一致した家族として、単純さ、柔和、確信、そして愛が、存在するべきである。」(教会への証 2 巻 578 ～ 579)

「主は、安息日を守る人々が、彼らの集会を維持し、それを興味深いものにするために、大きな関心を持たなければならないことを、わたしに示された。この方面にもっと関心と力を注ぐことが、大いに必要である。すべての者は、主のために、何かを語らなければならない。なぜならば、そうすることによって、彼らは恵まれるからである。集会をやめることはしないで、たびたび互いに語り合う人々について、覚えの書が書かれている。残りの民は、小羊の血と彼らのあかしの言葉によって勝利すべきである。ある人々は、小羊の血だけで勝利するものと思って、自分たちで特別の努力をしていない。神は、恵みのうちにわれわれに言葉の力をお与えになったことを、わたしは見た。神は、われわれに舌をお与えになった。われわれは、その用い方について神に責任を問われるのである。われわれは、われわれの口をもって神に栄光を帰し、真理と神の限りないあわれみをほめたたえ、小羊の血によるわれわれのあかしの言葉によって勝利しなければならない。」(初代文集 215, 216)

(52 ページの続き)

ています。唯一(ゆいいつ)、永遠に続くものは、神様のみ言葉と、自分たちの生活の中でその教えにしっかりとついている人々だけです。「主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。たしかに人は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない」(イザヤ 40:7, 8)。



2. 忍耐について、もう一つ教訓があります。「忠実(ちゅうじつ) な人は多くの祝福(しゅくふく) を得る、急いで富を得ようとする者は罰(ばつ) を免(まぬか) れない」(箴言 28:20)。人がたくさんのお金をいそいでかせごうと思うとき、しばしば、正直にではなく、それを得ようとする誘惑(ゆうわく) がおとずれます。聖書は、このことについて、言葉の絵を示しています。「しゃこが自分が産(う) んだのではない卵(たまご) を抱(だ) くように、不正(ふせい) な財産(ざいさん) を得る者がある。その人は一生の半ばにそれから離(はな) れて、その終りには愚(おろ) かな者となる」(エレミヤ 17:11)。ここにある種類の鳥の絵があります。その鳥は卵をあたためますが、生まれるまで十分にあたためることをしないのです。なんとおろかなことでしょう! かわいそうな母鳥は、赤ちゃんが出てくるのを見る喜びがありません。この言葉の絵は、だまして金持ちになろうとする人に訪れる失望(しつぼう) を示しています。神様のみ言葉は、はっきりしています。

「事の終りはその初めよりも良い。耐え忍ぶ心は、おごり高ぶる心にまさる」(伝道の書 7:8)。人生で本当に大事なものは、物語の結末です。忍耐強くなって、神様のみ国でのハッピーエンドを目指していきましょう!

ロックガーデン風ベジカレー

〔材料〕 6皿分

野菜仕立てカレールウ	6皿分
炒め用玉ねぎ	2個
ニンニク	1片
しょうが	1片
玉ねぎ	大1個
人参	1本
ジャガイモ	2個
かぼちゃ	1/6
ぶなしめじ	半パック
ブロッコリー	1/3
ナス	大1本
ピーマン、パプリカ（赤、黄）	各2個ずつ
ミニトマト	12個
野菜スープの素	小さじ2

〔作り方〕

1. 最初に玉ねぎ2個分をみじん切りにして餡色になるまでよく炒め、そこにすりおろしたニンニクとしょうがを加えて一緒に炒めた後、水リットルと野菜スープの素を入れ、野菜仕立てのカレールウで2～3時間ほど、弱火で火をつけたり、消したりしながら焦がさないように煮つめる。
2. 野菜はみな一口大より少し小さめに切り、玉ねぎ、ジャガイモ、人参、かぼちゃ、ブロッコリー、ぶなしめじ、ピーマン類を煮くずれしない程度に固い物から、それぞれ固めに野菜スープでボイルしておく。ナスは油で揚げておく。
3. カレールウの味が整ったら食べる直前に2.の野菜と、野菜をボイルしたスープをカレールウの中に入れ、火が通る程度に煮つめ、最後にミニトマトを入れる。
4. 野菜を均等になるよう盛り付けて、できあがり。

◎野菜はみな食べる直前に入れます。

煮つめたカレールウを一日置くか、冷凍しておくと、尚おいしくなります。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



物語の結末（けつまつ）は？

聖書が教える最もすぐれた資質（ししつ）の一つは、**忍耐（にんたい）**です。わたしたちが何かほしいとき、ほとんどの人は、今、それがほしいのです。ときには、待（ま）つことがむずかしいのですが、神様は、待つのはたいてい良いことだとおおせになります。このお方には、わたしたちが何かを待つようにさせる賢明（けんめい）な理由があります。それはたいてい、このお方が何か別のもの、つまり何かもっと良いものを与えることがおできになるからです。ですから、もし、ときには生活が悲しくなりそうに見えても、結末は**ハッピーエンド**になることができるのです。そう、ほとんどの場合がそうです。

聖書は、このようなことについて、役立つ教訓（きょうくん）をおしえるために、言葉でできた絵を用います。**忍耐**についての言葉の絵がたくさんあります。いくつか例を見てみましょう。



1. 「主を待（ま）ち望（のぞ）め、その道を守れ。そうすれば、主はあなたを上げて、国を継（つ）がせられる。あなたは悪しき者の断ち滅（ほろ）ぼされるのを見るであろう。わたしは悪しき者が勝ち誇（ほこ）って、レバノンの香柏（こうはく）のようにそびえたつを見た。しかし、わたしが通り過ぎると、見よ、彼はいなかった。わたしは彼を尋（たず）ねたけれども見つからなかった。全（まった）き人に目をそそぎ、直（なお）き人を見よ。おだやかな人には子孫（しそん）がある」（詩篇 37:34～36）。ここで、わたしたちは見事に葉のしげった大きな木を描（えが）くことができます。この木が枯れるなんてだれも考えられないことでしょう！しかし、悪人のように、その木も永遠に続くことはないのです。わたしたちは、植物が本当はどれほどもろいものかを知っ